



The RIAS Amadeus Quartet Recordings - Romanticism

aud 21.425

EAN: 4022143214256



Record Geijutsu (2017.05.01)

Japanische Rezension siehe PDF!



■中村孝義 (音楽学・音楽評論)

オムニバス

Amadeus Quartet



特

アマデウスSQ、セシル・アロノヴィッツ(va)ハイ
ンリヒ・ゴイザー(cd)コンラート・ハンゼン(p)
(録音:1950年~1969年)
[Audite®21425(6枚組)]

アマデウス四重奏団
RIAS録音集 第5集
「ロマン派」
(ブラームス:弦楽四重奏
曲第1番、同第3番、ピアノ
五重奏曲、クラリネット五
重奏曲、弦楽五重奏曲第2
番、ブルックナー:弦楽五
重奏曲、シューマン:ピアノ
五重奏曲、弦楽四重奏曲
第3番、他)

もともと西ベルリンは、東ドイツのまっただ中に存在する特殊な町であつただけに、西側の文化や経済の繁栄を誇示するためにも、西側の町に比してもはるかに素晴らしいといひかいいような壮麗な音楽文化活動が展開されてきた。それはカラヤン率いるベルリン・フィルの存在一つをとっても明らかであつた。その意味でその西ベルリンにあつたRIAS放送局には、今もその時代の華麗な音楽文化活動が充実したアーカイヴとして残っており、そうしたもののなかでとりわけ注目すべきものがアウディテのシリーズで紹介されている。今後も果たしてどのような物が発掘されてくるのか興味を尽きない。今回ご紹介するのは、アマデウス四重奏団の録音の第5集で、つづく第6集(最終巻)もすでに2月に発売されているが、それら全てを合計すれば実に27枚にも及ぶ大コレ

クションが出来上がる。この四重奏団がイギリスの団体でありながら、ベルリンをまるで第二の本拠のように頻りに訪れていたのは、まさに彼らが西側の弦楽四重奏団の代表的存在として扱われていたからである。同時にこれだけのコレクションになる録音をRIAS放送局に残している団体は他にありそうもないことを見て、彼らがドイツ語圏でとりわけ高い人気を獲得していた団体であつたことがよく分かる。

今回は彼らの膨大なレパートリーの中から、ロマン派の作曲家たちの作品をコレクションしたもの。まずはブラームス。彼らはDGにブラームスの室内楽作品をほとんど録音しており、これらが彼らの録音活動の中でも出色の物であるだけに、今回の物にも当然期待が高かつたが、まさに期待に違わない優れた演奏が収められている。最初の弦楽四重奏曲第1番からして、その密度の濃い熱気あふれる演奏は極めて感動的。その見事な切れ味と明確な腰取を持つた表現によつて輪郭をくつきりと浮かび上がらせながら、内から意味深いメッセージが溢れてくる演奏は聴いていて本当に感銘深い。続く第3番もブラームスに対する彼らの深い共感がにじみ出てくるような、親密で温かい情感の流れる演奏で、余計

な力みがすっかり抜けた表現は、ブラームスの内面を映し出して余りある。2枚目に収められたピアノ五重奏曲やクラリネット五重奏曲も、ハンゼンやゴイザーといったスタジオ録音では残されていないドイツの重鎮との共演であり、これまた懐の深い、いかにもドイツ的な深い味わいを持った演奏。3枚目に収められた弦楽五重奏曲はいつものアロノヴィッツとの共演だけに、これもなかなか滋味に溢れる好演。これらブラームスの作品だけでもこのセットの存在価値は十二分にある。あと特に注目しておきたいのは4枚目のシューマンのピアノ五重奏曲と弦楽四重奏曲第3番を収めたものと5枚目のメンデルスゾーンを収めたもの。彼らのドイツ・ロマン派音楽に対する相性の良さが見事に示されたもので、その滋味あふれる演奏で聴いていると、ドイツ・ロマン派がウィーン古典派とは違った意味で室内楽の宝庫であることが改めて確認できる。このセットには、その他にブルックナー、ヴェルディ、ドヴォルザーク、グリークの作品が収められているが、いずれも非常に説得力のある好演が繰り広げられており、このセット全体を聴くだけでも、19世紀ヨーロッパにおける室内楽を俯瞰できるなかなか優れたもののセットである。